

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。答えは指定されたもの以外は国語一五の解答用紙に記入すること。

五月の津軽は待ちこがれた春を A ように、サクラの後にリンゴの花が咲き、ついでに B 花の季節となります。

リンゴの花はつぼみのうちは濃いピンク色で、開くと真っ白になります。サクラの花もきれいですが、個人的にはリンゴの花は花の代表ではないかと思うほどです。

桜は花見をする人の方を向いて咲きます。葉も遠慮して後から出ます。(a)、リンゴの花は人間なんか気にせず、つやつやした緑の葉とともに上を向いて咲くんです。ちよつといばつていっているように見えます。といっても、それは上その畑の話で、我が家のリンゴ畑だけは何年もその花を見せることなく沈黙を続け、春は全くとすれてくれませんでした。

無肥料、無農薬の完全実施から九年目、リンゴ畑は長い間、病気と虫にさいなまれ、無残な姿をさらしていました。生活はどん底でした。地獄でした。花が咲かないのが当たり前になっていました。

(b)、一九八八年(昭和六十二年)の五月十三日のことは忘れられません。

リンゴ畑は四カ所ありました。一番最初に無農薬、無化学肥料栽培に移行した東岩木山にある八十八アールの畑が答えを出してくれました。スタートが七八年のことですから、もう十一年も経過していました。

畑は一分散しており、苗作り、田植えの季節とあつて、私はあつちに行ったりこつちに來たりして二週間もリンゴ畑の姿を見ていませんでした。④これくらい遠ざけていたのかもしれない。

私のとなりの畑の生産者である竹谷銀三さんが朝の七時ごろやつてきました。私は田植えの準備で田んぼへ向かうため、長ぐつをはいている時でした。

竹谷さんが「木村、木村、畑、見たが。花咲いだよ」と教えてくれたのです。

内心、今年こそはという期待もあつたのですが、辛酸をなめ続けてきただけに確かめるのがこわかった。だから、「花咲いだよ」のロウホウに「本当か」と言いました。一瞬、からかわれているのかと思いました。

しかし、④もしかしだろという気持ちで急いで女房の美千子を呼び、田植用の長ぐつをはいたまま、中古のバイクにまたがりました。ニタイにぎぶとんを敷いた原付バイクに乗った女房は無言でしがみついていた。農道の砂利道をアクセル全開で登っていききました。どうやって現場に着いたかわからないほど混乱していました。

一つ手前の生産者の畑に松の太木に囲まれた小屋がありました。その畑の中にバイクを止めました。そこからは自分の畑に行けません。花が咲いていると、この目で確認したいのですが、見るのがこわくて足が思うように進みません。

春のリンゴ畑は葉っぱが小さいからずっと奥まで見わたせます。他の畑が満開なのは春だから当たり前ですが、私の畑は尋常でなかった。となりの畑の見まちはいいではないかと何度も疑いました。そつとのぞき見るようにして視線を走らせると、私の畑は緑色ではなく、まぶしい白いヨウコウに包まれていました。「ああ、白い」。そう言つたと思います。

「よく、がんばつてくれたなあ」。あとは涙で全部見ることができました。女房とそこで二人、涙を流し立ちつくしていました。

⑥忘れられない日です。

もう二十年も前のことなのに、今でも思い出すと涙が出てきます。リンゴが自らの力をふりしぼつて咲いてくれました。⑦ようやくリンゴの木が自分のことをわかつてくれた。そう思うとうれしくて、自分の畑までたどり着くと「ああ、咲いた、咲いた」という感じで半日、その畑をおどろようにして回りました。

あの版画家の C 棟方志功さんのようだったかもしれません。同じ津軽人のもつけ(お調子もの)の血が流れているからでしょうか。棟方さんは絵バカと言われるほど版画に心血を B 入です。無農薬リンゴに②「心不乱に取り組んできた私のことを「リンゴの棟方志功」と言ってくれる人がおりました。ありがたいことです。

その後、翌年に無肥料、無農薬に移行した百二十アールの畑でもいくらか咲いているのを確認して、さらに二つの小さい畑も全部見て回りました。

後で気がつく、この日は食事をとることも忘れていました。午後三時頃家に戻つて、また一人で畑に來ました。お祝いに日本酒をリンゴの木の本一本にふるまおうと思つたのです。根つこのところに少しづつかけて、「ありがと、よく花を咲かせてくれたね」と C の言葉を伝えて歩きました。肥料も何も与えないでいたら、七、八月になると晩秋のような姿になりました。ご飯を食べさせないで「生きなさい」と過酷なことを強いてきたようなものです。何年もです。リンゴの木はその困難を乗り越えて花を咲かせてくれたのです。

⑧私も相伴させてもらいました。すつかりいい気持ちになつてリンゴの木の下に寝ころびました。地面から白い花びらをながめて、「何てきれいなんだろう」と思いました。その夢心地の酔いと青い空が静かに私の体を包みこんでくれるようでした。

その頃私の畑はまだ蛾の幼虫でいっぱいでした。すごい数のハマキムシを思えば、本当によくリンゴの木が耐えて応えてくれたと思います。

養子の D 分家の私に両親もよくこれまで Каттホウタイを許してくれたいと思います。私は理解ある家族に恵まれました。親父(義父) D (義母)がまさか早朝に畑に行つてすでに花を確認していたとは知りませんでした。⑨「言も言わなかったのです。自分の目で確認してからという心づかいからでしょう。知らなかったのは私と美千子だけでした。

親父は、最初の畑がいつ咲いたか、次の年のも全部じゃないけど六〇パーセント咲いたから、満足はしないだろうけれど、喜び安かったです。はと思います。苦勞のかけ通しでしたから。

その前年、ゴルフボールよりちよつと小さいくらいリンゴが二個できました。すべての畑の中で最初に農薬をやめた場所にあるたつた一本のフジのリンゴの木が、七個の花を咲かせたのです。そのうち五個はハマキムシに食われ、二個だけ収穫できました。このかけがえのない二個のリンゴは神棚に上げた後、家族で大切に食べました。とびきりのおいしさでした。糖度は二十四度もありました。

普通この手の小さいリンゴならとてもまずくて食べられません。ところが、そのおいしかったこと。割つたナイフをつけておくと、ナイフにリンゴがくっついてきました。それほど糖度がこの小さな実につめ込まれていました。甘いなんてもんじゃなく甘さのキョクゲンだと思いました。まるでおかしでした。

写

リンゴの復活のきざしは九月ごろから新梢が少しずつ発生するなど、見てわかるようになりました。今まで八月ごろには全部落ちていた葉っぱが十月の末まで三分一の程度残りました。もうだいじょうぶ、行けるかもしれない、そう確信めいた思いがありました。

これでリンゴで食っていい。

去年とちがう。たれも気付かない新しい花芽を見た。

たかが五ミリの小さな世界だけど、これで生きられる。

自分の生き方はまちがっていなかった。

それでも、自信を持って女房に言えませんでした。「また夢で終わるのかな」というおそれがあったからです。

花芽を見ればわかります。普通の畑なら、細目の芽とちよつとふつくらした大きめの芽があります。太いのは花の芽で細いのは葉になります。

ところが、私の畑はいつも葉っぱを落としてきたから、ふつくらしていません。花芽と葉芽も栄養が足りないのか細くて同じような状態でした。

私はその小さな変化に気づいていても女房には来年、花咲くよとは断言できませんでした。まさかこんなにも花が咲くとは思いませんでした。

よくやめなかつたなと思います。なんで好き好んで貧乏してきたのだろう。無農薬を始めてから十一年はあまりにも長かったです。無収穫時代が九年もありました。同じ津軽で私と同じような無農薬栽培にいだんだ先人が何人かいます。私もその畑に何度も足を運びましたが、やはり①継続でき②経済的に三五年が限界でした。私も③こんなバカなことはしてられない。やめよう、やめよう」と思いながら、次の年また始めていくという状態でした。花が咲いたらもういたわしくて(もったいなくて)

④摘花できません。私にすれば、久しぶりのリンゴでした。もう摘花なんかできませんでした。

そのころになるとなりの人々も、畑の様子が変わって、よくなっていくのを喜んでくれるようになりました。

「花咲いたよ。リンゴなるよ」とみんな喜んでくれたのです。

最近、⑤大きく風向きが変わってきました。

周辺農家が一番の証人です。周辺の畑より私のリンゴは立派になってい

ます。昔はひどい人もいました。⑥私の畑にわざと農薬の袋を捨てる人もいました。

周辺の畑と何も変わらなくなっていると、文句を言われなくなるところか、私と同じ無肥料、無農薬でリンゴを作り始める生産者が出てきました。そこまできなくても年に十三回かける殺虫剤、殺菌剤の混合散布を五、六回に減らしたり、農薬をやめて⑦有機農業にひとまず向かっている姿は大歓迎です。

E、と教えてくれた竹谷銀三さんのところは二代目の誠さんが奮起して低農薬栽培に切りかえ、県の特裁農家になっています。となりの上の農家も農薬、肥料を使わない農業に向かっています。若い人たちが変わってきています。

銀三さんの奥さんは木村自然栽培の広報部長的存在です。木村という人がいるかと聞かれれば「それはうちの畑のとなりだよ」と胸を張って答えてくれています。広報部長は「⑧木村の時代が来たね」と持ち上げてくれます。

周りの生産者は木を抜いてくれました。リンゴの木の間隔は八メートルあります。一本抜くことで二十メートルの間ができます。「西風がふいても木村のところに農薬が飛はないだろう」。私の畑を思いやつてくれる気持ちがうれしいです。

(『リンゴが教えてくれたこと』木村秋則)

注1 百花繚乱：たくさんの花がいつせいに花開くこと

注2 棟方志功：青森市生まれの版画家。国際的に評価が高い

注3 分際：自分の身分や力の程度

注4 摘花：余分な花をつみとること

注5 有機農業：化学肥料や農薬をひかえ、動植物から得る肥料を使っ

て、人間の体に安全な食糧の生産を目指す農業



問一 本文中のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A Bに入れるのにふさわしい言葉をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- A 「ア 送る イ 受ける ウ 告げる エ 見せる」
B 「ア こめた イ あてた ウ 入れた エ 注いだ」

問三 () a・bにあてはまる言葉を次からそれぞれ選んで記号で答えなさい。

- ア だから イ なせなら ウ また エ さらに オ つまり カ しかし キ それとも

問四 ① 春は全くおとずれてくれませんでした。とはこの場合どのようなことですか。もつともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 売り物になるようなリンゴの収穫ができず、ぜいたくな生活ができないこと。
イ リンゴの花が全く咲かず、リンゴを作る者の喜びが味わえないこと。
ウ つやつやした緑の葉だけがでてきて、リンゴの花は下を向いていること。
エ リンゴ畑と田植えで忙しく、春なのに花を楽しむゆとりがないこと。

問五 ② 畑が答えを出してくれました。とありますが、「私」にとって畑が出してくれた「答え」とはどのようなことだったのですか。もつともふさわしいものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 無農薬・無化学肥料栽培は、東山木山の土の質にこそ適していたということ。
イ 無農薬・無化学肥料栽培だったが、病気がなく害虫のいないリンゴ畑になったこと。
ウ 無農薬・無化学肥料栽培こそ、リンゴの豊作を約束するものであったということ。
エ 無農薬・無化学肥料栽培でも、リンゴの花を咲かせることができたということ。

問六 ③ 分散して とありますが、「分散」の対義語を漢字で書きなさい。

問七 ④ ③ わくわく とありますが、どんなことがわくわくしたのですか。もつともあてはまるものを次から選び記号で答えなさい。

- ア 今年もまた失敗だったという結果をつきつけられること。
イ 周辺の農家にめいわくをかけてしまう結果になること。
ウ 予想以上に豊作で収穫しきれない結果となること。
エ 苦労してきた家族から結果が出せずに責められること。

問八 ⑤ ④ もしかしら の後に言葉を補うとしたらどんな言葉が入りますか。十字〜二十字で自分で考えて答えなさい。(句読点も一字とします)

問九 ⑥ 私の畑は尋常でなかった とありますが、これは「私の畑」が具体的にどのような状態であったということですか。文中の言葉を使って説明しなさい。

問十 ⑦ 忘れられない日です とは具体的にいつのことですか。

問十一 ⑧ ⑦ ややへリンゴの木が自分のことをわかってくれた とありますが、これは具体的にどのようなことですか。解答らへに合うように答えなさい。

問十二 ⑨ ⑧ 一心不乱 と同じ意味の四字熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一心同体 イ 一刻千金 ウ 一意専心 エ 一挙両得

問十三 C に入れるのにふさわしい二字の熟語を答えなさい。

問十四 ⑩ 私もご相伴させてもらいました。について答えなさい。

- (1) これは何をしたということですか。
(2) ここから「私」のどのような気持ちがわかりますか。次からもつともあてはまるものを選び記号で答えなさい。
ア 苦しみを乗り越えられた喜びを、リンゴの木と分かち合いたい気持ち。
イ リンゴの木だけがお祝いするのはかわいそうなのでつき合ってあげたいという気持ち。
ウ これからもつとリンゴの花が咲いて、収穫が増えるように期待する気持ち。
エ 桜の後にリンゴの花が咲いた美しい津軽の春を味わいたい気持ち。

問十五 D に入る「親父」の対義語をひらがなで書きなさい。

問十六 ⑨ 「言も言わなかったのです」 について答えなさい。

(1) 何を言わなかったのですか。

(2) 一言も言わなかったのはなぜですか、考えて自分のことばで答えなさい。

問十七 ⑩ だれも気付かないが新しい花芽を見た とありますが、「新しい花芽」とはどのようなものでしたか。十五字で文中からぬき出して答えなさい。

問十八 ⑪ 継続できません とありますが、だれが「継続でき」ないのですか。

問十九 ⑫ こんなバカなことばはしてられない。やめよう、やめよう」と思いながら、次の年また始めている とありますが、この時の私の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲から批判され、仲間はずれになるのをおそれながらも、いつかは成功して理解してもらおうという気持ち。

イ むだなことをしているのかもしれないと迷いながらも、来年は成功するのではと、希望を捨てられない気持ち。

ウ 家族に苦勞をかけ通しの自分をおろかだと思いつつも、自分の成功のためには家族の犠牲はしかたがないと思いつ気持ち。

エ もっとこれ以上失敗はできないという責任を感じながらも、無農薬栽培を成功させて名声を手に入れたいという気持ち。

問二十 ⑬ 大きく風向きが変わってきました とありますが、これはどのようなことですか。次からもっともふさわしいものを選び記号で答えなさい。

ア 以前は無農薬栽培の情報が少なかったが、今は教えてくれる人が増えてきたこと。

イ 以前は害虫だらけだった畑が、今は見直しがえるように花が咲くようになってきたこと。

ウ 以前は花が咲いてもだれも見向きもしなかったが、今は関心をよせてくれるようになってきたこと。

エ 以前は無農薬栽培は周囲の人に認めてもらえなかったが、今は理解してくれるようになってきたこと。

問二十一 ⑭ 私の畑にわざと農薬の袋を捨てる人もいました とありますが、これは「私」にどういうことを言いたかったのですか。考えて答えなさい。
答えは左の解答らんに入直接書くこと。

問二十二 E に入るのはまる言葉を文中から五字でぬき出さない。答えは左の解答らんに入直接書くこと。

--	--	--	--

問二十三 ⑮ 木村の時代が来たね とありますが、「木村の時代が来た」とはどのようなことですか。考えて自分の言葉で説明しなさい。
答えは左の解答らんに入直接書くこと。

--

